

ア ラ ス カ の つ り

太 田 保

テレビやビデオで紹介されている大自然の中での渓流つりに私もついに挑戦することができた。その一端について紹介したい。

6月末一週間のリフレッシュ休暇を利用してアラスカの州都アンカレッジ周辺でのキングサーモンつりを2日間、ハリバット（オヒョウ）つりを1日体験した。

初夏のアラスカの風景は北海道の札幌に似た感じであった。森は緑、町には花が咲き乱れ、心地よい風が頬をなでる。おまけに白夜。アラスカ最大の河川ユーロン川上流のロッジに水上飛行機で約1時間、赤いロマンチックなロッジに飛行機で横づけ、つりをする支流はユーロン川の濁った川とは違い透明度抜群の河川であった。この原因は源流が氷河か雪山かの違いのことであつた。

早速、胴長、ヤッケを身につけてつり案内人ボブさんとボートでキングサーモンのつりポイントに向かってまっしぐら。つり竿、リールはロッジのもの。

ボブさんがセットしてくれた、ルアーを

指示されたポイントに向かって流す。

水深1~2mの川底には真っ赤な色をしたキングサーモンがむれをなして上流に向かって泳いでいる。小説家であり大自然の釣り師開口健氏は非常に難しい釣りといっていたこのつりに初挑戦。何回も何回も流す。ポイントは川に横たわっている倒木、大きなサーモンがこれ見よがしに大きくジャンプ。結局、午前中はあたりすらない。河原でランチボックス（昼食）を食べて再挑戦。

すぐに、相棒と私に時間をおいてヒット。フィッシュオン（これが釣れた合図）と大きな声で高らかに宣言。これさえ叫べば、川縁の釣り人はリールを巻いて声援を送ってくれる。

竿は弓なりに曲がり、リールのブレーキがギーギーと鳴く。ヒットしたサーモンは最初から素直に寄ってくるような素振りを見せた後、大きくジャンプして、下流に向かってまっしぐらに走る。すぐボートで追跡する。一服したのを見計らって、ボート

を近づけて、リールを精一杯全力を出して巻くと竿は曲がる、寄る、直径1mもあるような網を寄せる。瞬間、また下流に向かってフルスピードで下る。この繰り返しを30分もやり300mも下る。汗がぼたぼた顔を伝って落ちる。体は疲労困憊、息はゼーゼー。仕留めた時はヤッタセ。タバコがうまい。

ガイドのボブさんはリリース、ノットリリースと聞く。当然ノットリリース。

キングサーモンを抱えて記念撮影。ライセンスに種類とつり上げた時間とサインをしてくれる。

この釣りはルールがあり、事前にライセンスを釣具店などで購入する。1日2,000円程度、キングサーモンは1日1人1匹、年間5匹、針が完全に口についている場合のみ確保でき、えらなどの口以外に針のある場合はリリースで軽蔑の眼でみられる。ガイドは優しく、懐抱して元気になるまで世話をした後、放す。

1日目はお互いこの2匹で満足し、開口健もたいした事がない。簡単に釣れるではないかと気炎をあげて帰還。釣れたお礼のチップを感謝の気持ちを込めて渡す。途中、若いレンジャー（研究者）に呼び止められてサーモンの鱗を採取。資源保護の基礎資

料にするそうである。日本も見習いたい。

釣りあげたサーモンはロッジで計量し記念写真を取った後ガイドが解体してくれて、すぐに冷凍庫で保管してくれる。雌の場合には筋子が入っているのでこれは冷蔵庫にと頼む。残念ながら、今回は雌は釣れなかつたのでこの心配はなかった。

午後は満足感にひたり、のんびりとビールを飲みながら日光浴をしたり、昼寝をしたりして過ごし、夕方からルアーの投げ方の特訓をガイドから受け、1時間ほどで格好がつくようになり、2日目の自信がフツフツと沸き上がる。

2日目も快晴で恰好の釣り日より、昨日と同じポイントで再度挑戦。今度は昨日と同じルアーでは午前中は全く当たりがない。ボブさんの話ではこのルアー選定は毎日天候、川の状況などで異なり、長年の経験で決定しているそうで、ボックスの中にはいろいろなルアーやフライが整然と納められていた。

次のボブさんが選定したのは自己流のフライで、これがサーモンに気に入られたのか、入った瞬間からヒットした。

私の最初が雌で、格闘の末、網でくい上げたが、背鳍で釣れたため、リリース。次も間髪を入れず、大物がヒット。昨日よ

り引きが強い。なかなか寄らない。ブレーキもきかない。どんどん下流に流される。フィッシュオンと呼びながら、半分は優越感に、半分は不安に駆られながら必死でリールを巻く。結局500mほどの下流で立木の間を通られ、木にぶら下がりながらの格闘の末に糸を切られて終わり。ビッグ、ビッグとガイド氏に労わられて元のポイントにもどった。相棒がつけてくれたタバコは旨かったが、一緒に飲んだビールの苦みはきつかった。相棒がその後、すぐにヒットし、昨日より大物を30分以上の格闘の末にものにし、ライセンス通りの釣果であった。私はその後全くヒットせず夕食後、白夜の午後11時すぎまで頑張ったが、1匹に留まつた。しかし、キングサーモン釣りの醍醐味は十分すぎるほど味わつた。爽快、爽快。

これに比べるとハリバット釣りはただただ重く、疲れるだけあまり感動がなかつた。この釣りもライセンスが必要で1日、1人、2匹の制限がある。

リゾート地（民宿風のホテルが1建だけ）のホーマーからモーターボートでリアス式海岸特有の入り江を3時間吹っ飛ばして入り口付近の小島周辺でこぶし大のおもりと大きなクエ針に冷凍ニシンの餌をつけ

てドボンと海に投げて100mほどの底に達したら、2～3回上げ下げをすると急に重くなり、魚がかかった事が分かる。重く大きなリールをただ必死に巻く。重い、重い。釣り上げる寸前で少し一暴れし、船上に、船頭さんがまた、リリース、ノットリリースと叫ぶ。一匹目は釣れない事も考えて体長70cmほどを納めた。

しかし、前日船着き場で見た、2mを越えるような大物ではなかったのは残念ではあるが一匹目はそれなりに興奮した。

しかし、2匹目もすぐに釣れ、海底にはハリバットが畳を敷き詰めたようにびっしり口を開けているのではないかと思うほど簡単に釣れる。しかし、ホーマーの看板になっているような2mを越えるような大物は釣れない。程々のものをもう一匹納めて、約1時間の釣りは終了した。同船のアメリカ人の家族は飽きもせず大物を求めて釣りつづける。肉食人種と米食人種の違いを感じる。

帰るとこのハリバットを看板に白い腹部を表にして刺して記念撮影。

この獲物は男の子（高校生の夏のアルバイト）が5枚下ろしにして白い身のみをビニール袋に入れて、はいどうぞと渡してくれる。はい、チップで受け取る。

これらの獲物を日本に持ち帰るには航空機の手荷物制限30kg以内になるように解体、梱包してくれる専門業者に頼むと出発前に空港に届けてくれるシステムが出来ており便利である。冷凍しているため、成田でもスムーズに通してもらえる。高々3日間の釣りだったがおもしろかった。
みなさんも挑戦してみられてはどうですか。

(株)復建技術コンサルタント)

